

第4章 小 結 ~尾高御建山遺跡の落し穴~

立地について（挿図24参照）

尾高御建山遺跡の落し穴は、1～3区を通じて14,400m²（うち、台地上の平坦部12,800m²）の範囲に50基が存在した。当遺跡は台地縁辺部の海拔33～36mの範囲に位置し、南側には古来、氾濫流によって刻まれてきた谷がある。西側は比高差-15mをもって、日野川水系によって形成された氾濫原が広がる。調査地は限定された範囲であるため、調査地外（特に、北側の畠地）にも落し穴の分布が広がることは予測されるところである。

規模について

落し穴の規模を平均値で表すと、検出面の長軸は101.8cm、短軸は80.9cm、底面の長軸は66.5cm、短軸は50.5cm、深さは96.1cm（明らかに上部を削平されたと思われるものは除く）である。底面ピットの平均規模は、径17.2cm、深さ18.1cmである。杭痕跡の平均規模は、径7.2cm、深さ16.8cmである。規模の上でのばらつきはあまりみられない。

形態について

平面プランは、ほぼ検出面形と底面形が同じ平面形系を示す。その組成は、長方形系（長方形・隅丸長方形）が34基、円形系（円形・橢円形）が16基である。断面形は崩落により変形したものはあるが、ほぼ直線的に立ち上がるものがほとんどである。

遺物・時期について

SK-77の最下層中から炭化木を検出した。あまりにもろく、顕微鏡観察のための切片採取ができなかったため、樹種の同定は不可能であった。ただし、島根大学の古野先生から、道管がはっきり観察できることから広葉樹材であり、年輪幅が極端に狭いので加工しやすいがもろい材質である、とのご教示を受けた。炭化木の時期については、液体シンチレーション¹⁴C年代測定によって、B.P.3250±25という結果が得られた。出土層位から、この落し穴の形成時期をほぼ示すものといえよう。

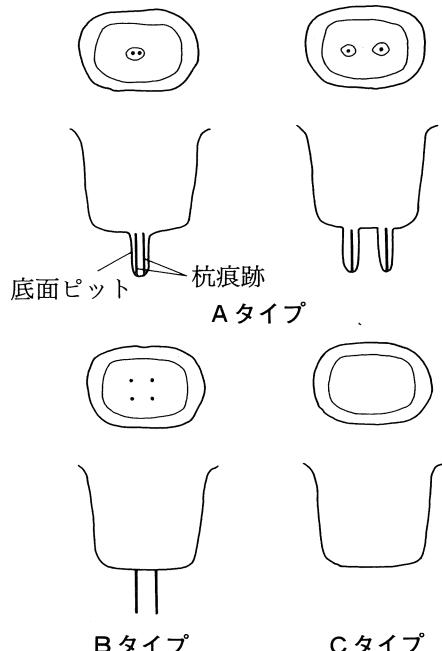
埋土について

当遺跡の埋積状況には1つの傾向がある。土層は、おおむね3段階の埋積を示し、上層は淡い黒褐色粘質土系、中層は地山土を含んだ黒褐色粘質土系、下層は地山土を少量含んだ淡い黒褐色粘質土系という構成が基本になっている。中・下層にみられる地山土（黄褐色粘質土）は土坑の上部、側面から崩落したものとも考えられるが、いくつか炭化物を含むものがみられることを合わせて考えると、カモフラージュのための蓋が陥没した可能性も考えられる。例外的な構成として、最下層に地山土と非常によく似た土質の層を検出した。SK-38・47・64・74の4基である。自然堆積とは考えがたく、杭の固定土として使用したか、一度落し穴として使用した後、再利用したか、または埋め戻して二次的な使用をした、等の可能性を推測する。

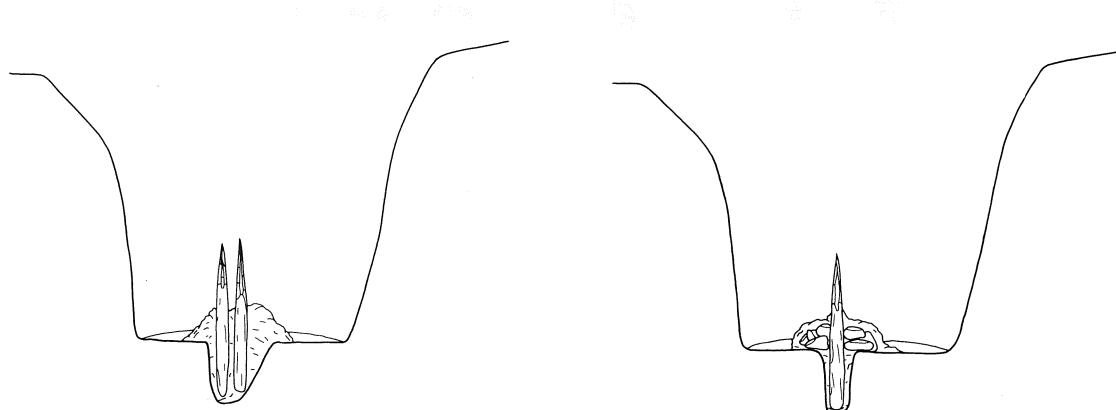
底面の施設について（挿表1参照）

①土坑底面の小穴について（挿図25参照）

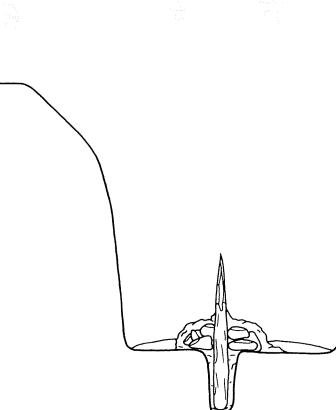
底面ピットを持つもの—Aタイプ、底面に直接穿たれた杭痕跡を持つもの—Bタイプ、小穴を持たないもの—Cタイプの3種がみられる。Aタイプを示す落し穴は、石、固定土を使用し、杭の



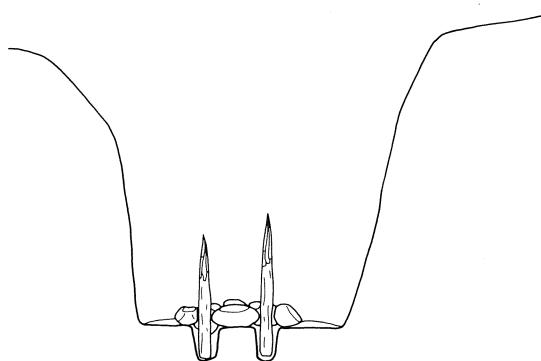
挿図25 落し穴の模式図



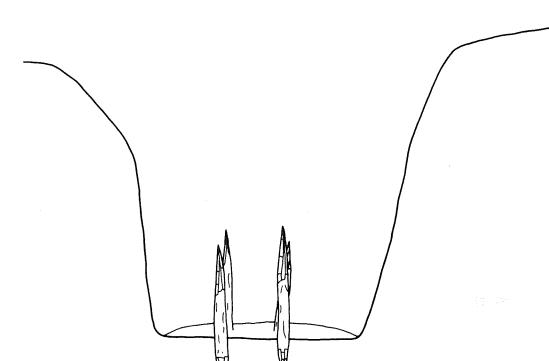
復元図 1



復元図 3



復元図 2



復元図 4

挿図26 落し穴の復元図

固定に特に留意している様子がうかがわれる。顕著な例として、SK-66（石・固定土）、SK-70（固定土）、SK-72・74（石）が挙げられる。Bタイプを示す落し穴は、杭を直接土坑底面に突き刺したものと考える。顕著な例として、SK-73が挙げられる。両者を比較すると、Aタイプの落し穴はBタイプの場合より、土坑底面に露れた地山の土質が固いようである。Aタイプの落し穴は44基、Bタイプの落し穴は4基、Cタイプの落し穴は2基を数えた。（挿表3）

②杭の固定について（挿図26参照）

杭を据えるにあたっては、まず底面に小穴を穿つか、否かという選択を迫られる。小穴を穿たない場合は、杭を立てない落し穴か、別の方法で杭を固定するかのいずれかとなる。小穴を穿つ場合は、上記のとおりAタイプとBタイプの2つの方法がある。いずれにせよ杭が安定して立つていればよいわけであるが、杭が固定されていない場合、固定材を利用してさらに杭の安定を図るものもある。それは、杭の基部及び底面ピットの隙間に土（固定土）をつめる（復元図1）、杭の基部に石（自然礫）を巡らせる（復元図2）、石と固定土を併用する（復元図3）の3つの方法である。このことについては、以下の①～③の順序で表して類型化することとする。

①タイプ別（A、B、C）

②固定土の有無（1～有 0～無）

③石の有無（1～有 0～無）

(*例：底面ピットを持ち、杭を石で固定したと思われるものA-0-1型)

	1-1	1-0	0-1	0-0	計
A	4	4	14	22	44
B	1	0	0	3	4
C	0	0	0	2	2
計	5	4	14	27	50

挿表3 落し穴の類型別数量組成表

番号	遺跡名	所在地	基数	類型				備考	文献 番号
				A	B	A+B	C		
1	青木	米子市	228	185	0	0	43	C-0-1が1基	(1)
2	樋ノ口第3	米子市	9	8	0	0	1		(2)
3	樋ノ口地区	米子市	3	3	0	0	0		(3)
4	成ヶ谷西(諏訪1号墓下層)	米子市	2	2	0	0	0		(4)
5	別所1号墳下層	米子市	2	1	0	0	1		(5)
6	諏訪遺跡群中原地区	米子市	1	1	0	0	0		(3)
7	諏訪遺跡群新田地区	米子市	4	4	0	0	0		(3)
8	福市吉塚地区	米子市	2	2	0	0	0		(3)
9	東宗像	米子市	10	10	0	0	0		(6)
10	喜多原第2	米子市	2	2	0	0	0		(7)
11	上福万妻神	米子市	1	0	0	0	1		(8)
12	奥谷堀越谷	米子市	8	3	0	0	5		(9)
13	泉中峰・泉前田	米子市	21	11	1	0	9	A-0-1が2基 C-0-1が1基	(10)
								B-1-0が1基	
14	尾高御建山	米子市	50	44	4	0	2		(11)
15	三部野	溝口町	2	1	1	0	0		(12)
16	清水谷	西伯町	11	10	0	0	1		(13)
17	林ヶ原	岸本町	6	5	0	0	1	A-0-1が1基	(14)
18	久古第1	岸本町	2	1	0	0	1	A-0-1が1基	(15)
19	大寺原	岸本町	5	5	0	0	0		(16)
20	百塚第1	淀江町	2	2	0	0	0		(17)
21	井手挾	淀江町	1	1	0	0	0		(18)
22	百塚第4	淀江町	20	8	0	0	12		(19)
23	大下畠	淀江町	2	2	0	0	0		(20)
24	勝負勝負の峰	名和町	3	1	0	0	2		(21)
25	茶畠第2	名和町	1	0	1	0	0		(22)
26	八重第3	中山町	29	25	1	1	2	A-0-1が1基	(23)
27	小松谷	中山町	4	2	0	0	2		(24)
28	化粧川	赤崎町	47	13	0	0	34	C-0-1が1基	(25)
29	森藤第1・第2	東伯町	32	16	0	0	16	A-0-1が1基 C-0-1が1基	(26)
30	大峰	東伯町	16	8	0	0	8		(27)
31	大畠	東伯町	26	18	0	0	8		(28)
32	水溜り・賀籠据場	東伯町	4	0	0	0	4		(29)
33	森藤第3	東伯町	5	2	0	0	3		(29)
34	青木第4	大栄町	9	8	1	0	0		(30)
35	大谷11号墳下層	大栄町	2	2	0	0	0		(31)
36	横峯	関金町	3	0	0	0	3		(32)
37	大山池、横峯地区	関金町	1	1	0	0	0		(33)
38	大山	倉吉市	4	1	1	1	1		(34)
39	イキス	倉吉市	3	2	0	0	1		(35)
40	大仙峯	倉吉市	1	1	0	0	0		(36)
41	頭根後谷	倉吉市	4	3	0	0	1	A-0-1が1基	(37)
42	後口野1号墳	倉吉市	2	1	0	0	1		(38)
43	立道東古墳群	倉吉市	6	5	0	1	0		(39)
44	中尾	倉吉市	84	31	26	22	5		(40)
45	長谷	倉吉市	57	28	6	0	21	類型不明が2基 A-0-1が3基	(41)
46	大日寺遺跡群	倉吉市	1	1	0	0	0		(42)
47	丸山	三朝町	7	1	0	0	6		(43)
48	万代寺	郡家町	53	有	?	?	有		(44)

挿表4 鳥取県における落し穴一覧表

この類型ごとの落し穴の数は挿表3に挙げているとおりである。これによると、固定土のみを使う(1-0型 4基)場合よりも、石のみを使う(0-1型 14基)場合の方が多い。杭の固定においては土よりも石の方が簡便であったのであろう。また、杭と石とを併用したもの(1-1型)は5基検出された。

鳥取県内の類例について（挿表4参照）

鳥取県内の落し穴について検討するにあたり、管見にふれる798基について分析を試みた（挿表4）。市町村別にみると、米子市(343基)、倉吉市(162基)、東伯町(83基)と続く。遺跡別にみると、米子市青木遺跡(228基)、倉吉市中尾遺跡(84基)、倉吉市長谷遺跡(57基)、郡家町万代寺遺跡(53基)、当遺跡(50基)、赤崎町化粧川遺跡(47基)、東伯町森藤第1・第2遺跡(32基)、中山町八重第3遺跡(29基)と続く。

当遺跡の類型にあてはめてみると、Aタイプが481基（総数の60%）、Bタイプ42基（5%）、A+Bタイプ（底面ピットと、底面に直接穿たれた杭痕跡の両方を持つもの、これは当遺跡には無いタイプ）が25基（3%）、Cタイプ195基（24%）、不明が55基となる。落し穴の底面に小穴を持つもの（A、B、A+Bタイプ）の方が、小穴を持たないもの（Cタイプ）よりも数が多い。

タイプ別にみると、Aタイプが多いのは、青木遺跡(185基)、当遺跡(44基)、中尾遺跡(31基)と続く。Bタイプは、中尾遺跡(26基)、長谷遺跡(6基)、当遺跡(4基)と続く。A+Bタイプは、中尾遺跡(22基)、倉吉市立道東古墳群(1基)、倉吉市大山遺跡(1基)、八重第3遺跡(1基)の4遺跡でのみ検出されている。Cタイプは、青木遺跡(43基)、化粧川遺跡(34基)、森藤第1・第2遺跡(16基)と続く。落し穴の底面に杭を突き刺したと考えられるもの（B、A+Bタイプ）の割合が大きいものは、中尾遺跡(84基中48基)である。逆に、杭を突き刺していないと考えられるもの（A、Cタイプ）の割合が大きいものは、青木遺跡をはじめ多数ある。特に青木遺跡は、総数228基を数えるが、Bタイプは1基もない。前述したように、土坑底面の土質が影響しているのではなかろうか。土質が固い場合は杭を設置しないか掘り込んでから杭を設置し、土質が軟らかい場所では杭を突き刺す。ゆえに、同じ落し穴群中に、小穴のバリエーションがみられる事もうなづける。

固定土の検出例については、当遺跡以外管見にふれないが、半截断面観察のための掘削という調査方法の有効性を、あらためて銘記しておきたい。一方、石をともなうものは若干報告されている。中でも、八重第3遺跡では、石を杭で固定した様子が明瞭な落し穴が検出されている。杭の固定材については、今後の発掘調査の展開に期待したい。

この世界に入って2年目を迎えました。教員派遣の身分でもあり（いろいろ思うことはあります）、発掘調査については、ゼロからの始まりでした。現場が稼働しているときはそれで手一杯ですし、現場が終われば息つく暇もなく報告書の作成に入ります。自己の知識・技量の向上をはかろうにも、その機会、時間が持てなかった（を持たなかった）というのが正直な感想です。ただ、この埋蔵文化財の調査には魅力を感じます。何が出てくるか掘ってみなければ分かりません。新しい発見をしたときには大きな喜びがあります。今年度は落し穴三昧でしたが、「なんだ落し穴か」という気持ちが、「されど落し穴だ」に変わってきました。いろいろな事がありました。

最後に、尾高御建山遺跡の発掘調査の実施及び報告書の作成に際して、指導・教示・協力頂いた各位に感謝の意を表します。

（仲田）

参考文献

- ・稻田孝司「西日本の縄文時代落し穴彌」『論苑 考古学』（天山舎、1993年）抜刷 挿表4の作成にあたり、稻田先生の＜表1 中国地方における落し穴検出遺跡一覧表＞を参考にさせていただいた。
- ・霧ヶ丘遺跡調査団『霧ヶ丘』（1973）
((挿表4の参考文献))
(1)『青木遺跡発掘調査報告書』I～III(1976～78)鳥取県教育委員会
(2)『諏訪遺跡群発掘調査報告書I』(1981)米子市教育委員会
(3)『諏訪遺跡群発掘調査報告書II』(1982)米子市教育委員会

- (4)『諫訪遺跡群発掘調査報告書III』(1982)米子市教育委員会
- (5)『諫訪遺跡群発掘調査報告書IV』(1983)米子市教育委員会
- (6)『東宗像遺跡』(1985)財団法人鳥取県教育文化財団
- (7)『喜多原第2遺跡発掘調査報告書』(1987)米子市教育委員会、喜多原遺跡発掘調査団
- (8)『上福万妻神遺跡』(1991)米子市教育委員会
- (9)『奥谷堀越谷遺跡』(1992)米子市教育委員会
- (10)『泉中峰・泉前田遺跡』(1994)財団法人鳥取県教育文化財団
- (11)『尾高御建山遺跡・尾高古墳群』(1994)財団法人鳥取県教育文化財団
- (12)『三部野遺跡発掘調査報告書』(1990)溝口町教育委員会
- (13)『清水谷遺跡』(1992)西伯町教育委員会
- (14)『久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書』(1984)財団法人鳥取県教育文化財団
- (15)『岸本町久古第1遺跡の『土壤』について』『水曜考古第15号』(1987)水曜考古俱楽部
- (16)『大寺原遺跡発掘調査報告書』(1981)岸本町教育委員会
- (17)『百塚第1遺跡』(1989)淀江町教育委員会
- (18)『井手挾遺跡発掘調査報告書』(1987)淀江町教育委員会
- (19)『百塚古墳群発掘調査報告書I』(1992)淀江町教育委員会
- (20)『大下畠遺跡』(1994)財団法人鳥取県教育文化財団
- (21)『大山山麓遺跡群調査報告書』3(1978)鳥取県教育委員会
- (22)『茶畑第2遺跡発掘調査報告書』(1990)名和町教育委員会
- (23)『八重第3遺跡発掘調査報告書』(1987)中山町教育委員会
- (24)『小松谷遺跡』(1975)中山町教育委員会
- (25)『化粧川遺跡発掘調査報告書』(1989)赤崎町教育委員会
- (26)『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』(1987)東伯町教育委員会
- (27)『大峰遺跡発掘調査報告書』(1985)東伯町教育委員会
- (28)『大畑遺跡発掘調査報告書』(1989)東伯町教育委員会
- (29)『水溜り・賀籠据場遺跡、森藤第3遺跡発掘調査報告書』(1988)東伯町教育委員会
- (30)『青木第4遺跡発掘調査報告』(1980)大栄町教育委員会
- (31)『大谷11号墳発掘調査報告』(1990)大栄町教育委員会
- (32)『横峯遺跡発掘調査報告書』(1986)関金町教育委員会
- (33)『大山池遺跡横峯地区(落とし穴)発掘調査報告書』(1989)関金町教育委員会
- (34)『大山遺跡発掘調査報告書(C・D地区)』(1989)倉吉市教育委員会
- (35)『イキス遺跡発掘調査報告書』(1989)倉吉市教育委員会
- (36)『大仙峯遺跡発掘調査報告書』(1990)倉吉市教育委員会
- (37)『頭根後谷遺跡発掘調査報告書』(1991)倉吉市教育委員会
- (38)『後口野1号墳発掘調査報告書』(1991)倉吉市教育委員会
- (39)『立道東古墳群発掘調査報告書』(1993)倉吉市教育委員会
- (40)『中尾遺跡発掘調査報告書』(1992)倉吉市教育委員会
- (41)竹中孝浩氏のご教示による。
- (42)『大日寺遺跡群発掘調査報告書』(1993)倉吉市教育委員会
- (43)『丸山遺跡発掘調査報告書』(1984)三朝町教育委員会発行、花園大学考古学研究室編集
- (44)『万代寺遺跡発掘調査報告書』(1983)郡家町教育委員会